

耕地の区画整理の研究について

小 出 進

大学院に入学して、研究テーマに迷ったが、結局、新沢嘉芽統助教授を指導教官として、耕地の区画整理の研究に取り組むこととなった。後日、岩手大学の教官となり、大学院学生を指導したさいに、畑の区画整理の研究をとりあげたが、農芸化学科の教官より、そういうテーマは研究になじまないと注意された。研究テーマとしては、広く漠然としている。研究目的が分かるようなテーマにしなければならぬのである。しかし、当時は耕地の区画整理を全体として検討しなければならない段階であった。

区画整理については、上野東大教授の耕地整理講義が明治40年代に出版され、その後、昭和30年の農林省(現農林水産省)農地局の計画基準「区画整理編」が、ほとんど同じという状態であった。この間、二、三冊の著書があるが、いずれも上野先生の著書の範囲である。すなわち、第二次世界大戦を挟んで、日本農業が地主小作制から自作農経営に代わり、耕作が小型ではあるが機械化し、区画整理の気運が高まったにもかかわらず、数十年の間、研究が進んでいなかったのである。耕地整理講義は、講義と題がついているが、耕地整理全般にわたる理論書であり、指導書である。

まず、上野先生以前の耕地整理の著書を含め数冊の目次すなわち、区画整理の構成を検討した。その結果、用排水、区画、農道、換地の4要素に分けて分析することにした。問題は、その順序である。実態調査によると、農家が区画整理を行うのは、機械化のために、農道が区画にダイレクトアクセスする必要があったからである。すなわち、農道が不足しているが、わが国の農地は分散錯圃であるため、地域の農家全員が共同して区画整理をしないと、農道が整備できない。用地買収では、一部の農家の農地だけが、つぶれるため、事業が進まない。したがって、論文は農道から始めることとした。2、3年後、区画整理の研究が一応終了し、干拓地の耕地について検討したが、農道から論じ始めたところ、どうにも説明つかないのである。用排水から述べると、干拓地の耕地方式を組み立てることができる。そこで、あらためて、上野先生の耕地整理講義を読みなおしたが、用排水から始めてあった。農道から始めたのは、即物的であり、水田であるためには、用排水が必須であり、理論的には、用排水から始めるべきであると反省した。しかし、書き直すのは大変なので、そのままにして発表した。序に、農道から始めた理由を述べるべきであった。

次に、区画整理の歴史にとりくんだ。当時の農業土木の卒業論文は、設計書をそのまま写すことであった。意義がないと思って私は印旛沼干拓の設計書を写した。しかし、大正初期からの、区画整理の設計が、それらによってたどることができる。大学の廊下の本棚に卒業論文が並んでいたの、ひっきりかえしていたところ、とおりかかった農工大のT助教授(後、アメリカ軍の研究所に頭脳流出し、帰国していない)に、なにをしているんだと聞かれ、説明したら、あきれていた。

現地の農家からの聞き取りを中心にして修士論文をまとめた。論文発表で、O助教授に「むだな努力をした。」と言われた。